

第5章 付論

上平寺城跡の構造 — 特に元亀元年の改修を中心に —

米原町教育委員会 中 井 均

1. はじめに

上平寺城跡は佐々木六角氏とともに近江守護にも任ぜられた佐々木氏の庶流京極氏の居城として著名である。その形態は標高669.0mに位置する詰城部分とその南山麓に位置する居館部分からなる典型的な中世城郭である。

今回、伊吹町教育委員会による測量調査が実施され詳細な遺構図が作成された。本稿では、この成果について若干の考察を行うものである。

ところで、上平寺城跡の名称であるが、城郭が存続していた時代の史料にその名を見出すことはできない。『江北記』では「大永三年三月九日 かりやす尾の御城より御忍にて尾州へ御取退候。」とあり、かりやす尾城と呼ばれていたことがわかる。さらに、『信長公記』元亀元年（1570）6月条には、「たけくらべ、かりやす両所に要害を構へ」と記されている。また、後世の資料でも、例えば「上平寺城古図」（伊吹町所蔵）は江戸時代初期に描かれた絵図であるが、そこでも「苅安尾城」と記されており、別名として、京極氏の祖、氏信が鎌倉の桐ヶ谷に邸を設けたことに由来する「桐（霧）ヶ城」とも記されているが、上平寺城の名称は見えない。さらに明和七年（1770）、深井彪によって編纂された『諸国廢城考』でも「苅安城」と記されている。

ところが、近世の地誌『近江輿地志略』では「上平寺は伊吹八箇寺の内也、真言宗也。門前の在家十軒許、西北の尾上に京極の居城の跡あり、上平殿といふ。天守の土台石垣今に歴然たり。」と記されており、上平寺という寺院の存在を記し、城跡については上平殿と称している。

また、『江州佐々木南北諸士帳』には「伊吹山刈安上平寺城主江北太守」とあるほか、『寛政重修諸家譜』の「京極家譜」では「（元亀元年）十一（二）月右府、浅井・朝倉と和睦のち高吉も上平寺城にかへる、」とある。

つまり、城が存続していた段階ではかりやす城、あるいはかりやす尾城と呼ばれていたようであり、近世の地誌で初めて上平寺城の名称が登場するようである。しかも、上平寺城についても本来は伊吹山寺に関わる上平寺という寺院名であり、その寺院を利用して築城されたことにより、上平殿と称されたのが後に上平寺城と呼称されるようになったようである。

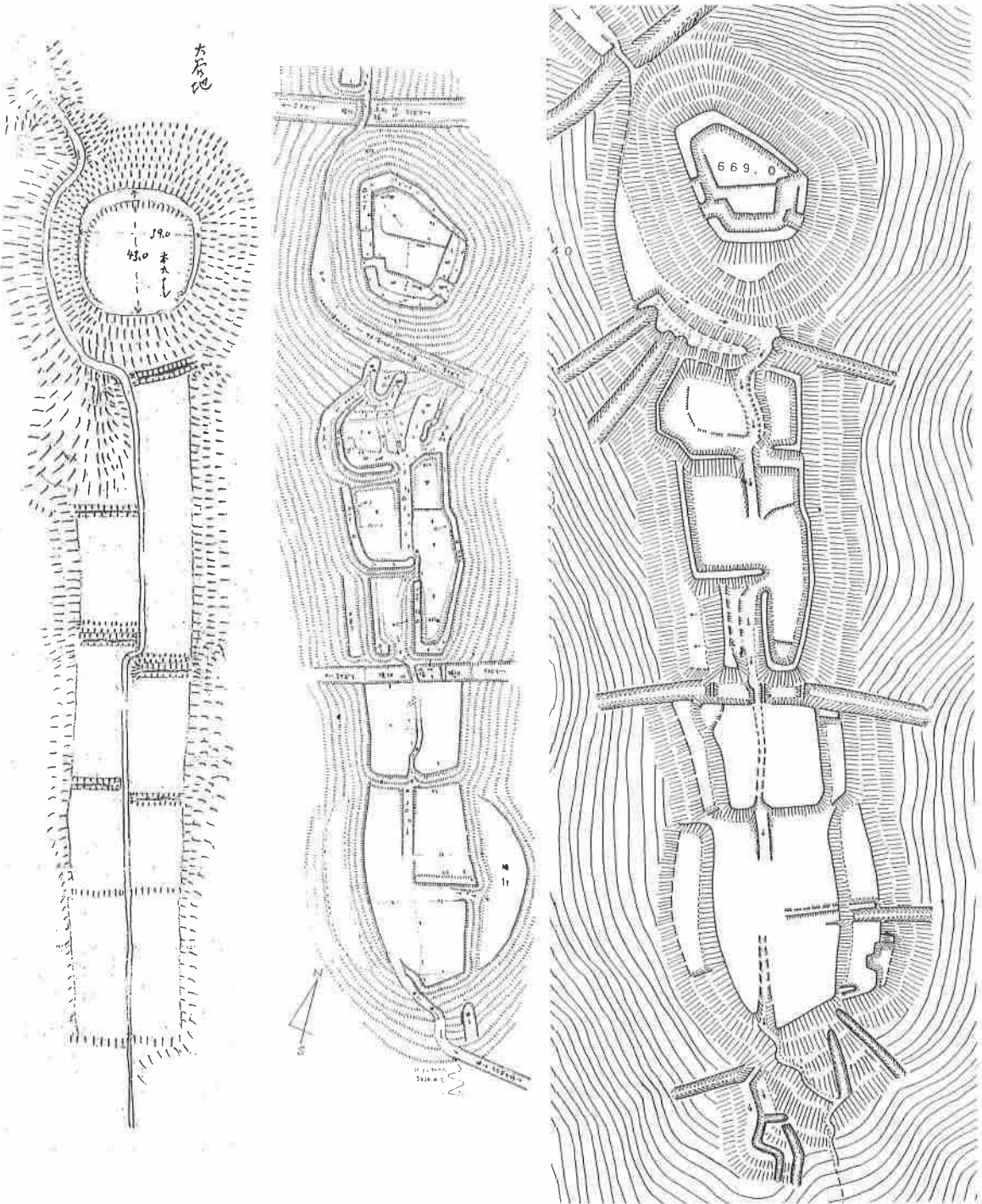
さらに地元では上平寺城とは呼ばれておらず、「キリガジョウ（桐が城）」と呼ばれるのが一般的であった。

こうしたことから本来苅安城跡あるいは桐ヶ城跡とすべきであるが、現在の研究ではほ

ば上平寺城跡の名称が定着しており、ここで荊安城跡・桐ヶ城跡に改称すると、かえって煩雑で混乱をまねく恐れがあり、本稿でも上平寺城跡を用いることとした。

2. これまでの研究

近江守護佐々木六角氏の本城である観音寺城跡、湖北の戦国大名浅井氏の本城である小谷城跡はいずれも大規模な戦国期城郭として全国的にも著名である。それらに比べて北近



第8図 上平寺城跡縄張図の変遷
(左から本邦築城史編纂委員会図、長谷川銀蔵・博美図、中井・高橋図)

江の守護京極氏の本城である上平寺城跡は史跡の指定も受けておらず、訪れる人も少ない。これは上平寺城跡が非常に高い山に所在し、熊笹に覆われ、熊も出没するという悪条件が人の来訪を妨げていたためと考えられる。

近代になってこの上平寺城跡を初めて紹介したのは、『日本城郭史資料』であろう。『日本城郭史資料』とは、昭和8年に陸軍の築城本部内に設置された「本邦築城史編纂委員会」が調査したわが国の城郭に関する手控稿本である。編纂を終えた正本は印刷を待つばかりであったが、昭和20年の東京大空襲によって焼失してしまった。この『日本城郭史資料』は全42冊におよび、現在国立国会図書館に所蔵されている。その第22冊「近江」のなかに上平寺城跡の略測図が掲載されており、これが上平寺城跡についての最も古い測量図であると考えられる。昭和十年代に作成されたものと推定されるが、形状は正確に描かれており、当時の軍の調査レベルの高さを窺い知ることができる。ただ、残念ながら調査時間が足りなかったのか図面は途中で終わっており、全体像は明らかにされなかった。

敗戦後、城郭研究自体に長い沈黙の時代が続き、特に中世城郭は構造を研究するのではなく、城主の歴史や合戦の歴史のみが語られることとなった。こうした状況のなかで、滋賀県内では、長谷川銀蔵、博美父子による精力的な踏査がおこなわれ、構造の把握に努められた。むろん個人的になされた調査であり、その姿勢は高く評価されるものである。この長谷川父子による上平寺城跡の踏査概要図は1985年に刊行された、『近江の城』第16号によって公表された。この図の公表によってようやく上平寺城跡の構造が把握できるようになったのである。ただ、長谷川父子は上平寺城跡の西側尾根に所在する弥高寺跡を上平寺城跡とし、「上平寺城古図」に記されている本城跡も、この弥高寺跡の地に比定されている（長谷川銀蔵、博美 1985）。

上平寺城跡を知る重要な絵画資料である「上平寺城古図」は永らく長浜市の個人が所蔵されていたが、近年伊吹町の所蔵となり、研究、活用に利便が図られるようになった。この絵図に記された内容と現状遺構とを比較検討し、さらには現状の遺構が京極氏の詰城の遺構ではなく、『信長公記』に記された元亀元年の「苅安尾城」であることを明らかにしたのが中井均、高橋順之である。2人は城跡の南端尾根筋に堅堀が存在することもはじめて図示している（中井・高橋 1994）。

こうした研究の深化に伴い、上平寺城跡の存在も広く周知されるようになってきた。加えて伊吹町教育委員会の毎年の草刈りにより、それまで来る人を拒んでいた城跡もようやくその全貌が見学できるようになった。

3. 上平寺城の歴史

上平寺城と京極氏の歴史については、第4章表1で高橋順之が簡潔にまとめており、大変利用しやすいので、詳細については参照されたい。ここでは構造を分析するために必要な事項のみ簡単に触れておきたい。

上平寺城の築城は京極高清と材宗とが講和した永正二年（1505）頃に高清が京極家の総領として築いたものと考えられている。しかし、大永三年（1523）には京極氏の内訌から焼失し、廃城となってしまった。つまり京極氏の居城としてわずか18年間余りしか機能していないのである。

ところが、前稿（中井・高橋 1994）でも述べた通り、上平寺城は京極氏の居城として廃城となった後、約40年後に再び山城として機能することとなる。『浅井氏三代文書集』に、「長政六 若宮文書（永禄三年：1560）十二月十二日」として「濃州境目かりやす尾と申処、一両日中ニ濃州ノ城ニ可申付之由風聞候間」とあり、六角義賢が美濃の斉藤義龍に浅井賢政（長政）を後方より攻めさせるために、かりやす尾に城を築かそうとした。賢政はこの風聞に接し、いち早くかりやす尾の城を攻めたものである。京極氏の詰城的性格から近江・美濃の国境を警備する境目の城としての性格へ変化したわけである。

『信長公記』元亀元年（1570）6月条に「去程に浅井備前越前衆を呼越したけくらべ、かりやす両所に要害を構へ候。信長公御調略を以て堀、樋口、御忠節仕るべき旨御請なり。六月一九日、信長公御馬を出だされ、堀、樋口謀叛の由承り、たけくらべ、かりやす取物も取敢へず退散なり。」とあり、浅井長政が築城したことが記されている。この年、浅井長政は織田信長との同盟を破棄し、朝倉義景方に内応した。越前で信長を討つことができなかった長政は信長領である美濃との国境を警備するために荊安城と長比城（坂田郡山東町長久寺）を構え、坂田南郡の土豪で、鎌刃城主堀秀安とその一族で重臣の樋口次郎左衛門を入れたのである。

この築城にあたって注目すべきは長政が越前衆、つまり朝倉義景軍の援助を得て普請されたことである。自領内の築城に他の大名の力を得るということは浅井軍の築城技術が劣っていたことを窺わせるとともに、兵力に優勢な朝倉軍が動員された結果であった（中井 2001）。

美濃からの織田軍進攻を阻む境目の城として改修を受けた上平寺城であったが、守備隊の内応により、戦わず織田軍の手中に落ち、以後廃城となった。

4. 測量成果からみた上平寺城の構造（第4図参照）

さて、上平寺城跡の構造については前稿（中井・高橋 1994）でも述べたところであるが、今回の測量図をもとに今一度分析しておきたい。

城跡は伊吹山より南に派生する、刈安尾と呼ばれる尾根の先端に構築されている。標高669.0mの山頂に主郭Ⅰを置く。主郭Ⅰの周囲には低い土塁が巡らされ、さらに曲輪内部は3段に構築されている。虎口は東西2箇所認められ、3段に段築された一番南側の段は両虎口からの進入路として構築されたようである。この主郭Ⅰの周囲の切岸は非常に高いうえ、急傾斜となっている。これは主郭が最も尾根筋に近い位置に配されたためである。

この尾根筋を防御するために尾根を切断する巨大な堀切㊦が設けられている。㊦の中央には土橋が架けられ、東西の両斜面へは塹堀となって尾根を遮断している。

⑦の土橋を渡ると主郭の切岸直下に設けられた帯曲輪Ⅱに入る。この帯曲輪Ⅱは尾根筋から曲輪Ⅲへの連絡路としても機能しており、敵が侵入してきた場合は曲輪Ⅲへ取りつかせないように2本の堅堀④・⑤と東端に堅堀⑥が設けられている。

曲輪Ⅲは主郭Ⅰの南側に配されており、三方に土塁を巡らせている。その南側に一段低く曲輪Ⅳがある。この曲輪Ⅳの周囲には高くて厚い土塁が巡らされており、本城跡中で最も見ごたえのある遺構となっている。特に圧巻は虎口⑧の構造である。南方より曲輪Ⅳに至るには堀切④に設けられた土橋⑨を渡って虎口⑧に進入するわけであるが、その間に外升形空間Ⅴを通過しなければならない。このⅤは曲輪Ⅳの土塁から常に横矢がかかるとともに正面の土塁からも攻撃を受けることとなる。しかも西側にも土塁があるため、縦列でしか攻められないようになっている。

曲輪Ⅳの南面は曲輪Ⅵとの間に堀切④が掘られており、東西斜面に向っては堅堀となっている。この堀切④で興味深いのは堀切が堅堀となる傾換点の堀底に土橋状の土塁が設けられていることである。おそらく堅堀を登ってくる敵に対する仕切の土塁と考えられる。

ところで、堀切④より南側にはまだ曲輪が続くが、それらの曲輪は土塁囲いとなっており、この堀切④によって明らかに曲輪機能に格差の存在することがわかる。その曲輪Ⅵであるが、東西にそれぞれ腰曲輪を伴っている。その南側に一段低く設けられた曲輪Ⅶは本城跡中最大の面積を有する曲輪である。従来の調査ではこの平坦面のブッシュが激しく、単調な平坦面でしか捉えられなかった。今回の測量調査ではさらに曲輪内に段差が設けられていたり、方形に巡らされた低土塁の存在が確認された。こうした遺構の存在から陣城のなかでも兵の駐屯場所として機能していた可能性が高い。曲輪の東西両側には曲輪Ⅵと同様に腰曲輪が設けられている。このうち東側の腰曲輪は堅土塁と堅堀⑦によって仕切られており、特に南側部分はさらに一段下へ取り付く小削平が認められ、虎口の可能性がある。

さて、今回の測量調査では、前稿（中井・高橋 1994）で「南側斜面には堅堀がいびつではあるが放射状に設けられている。」として存在は報告していたが、必ずしも実態を十分に把握できなかった南端斜面の堅堀群の存在を明確にした意義は大きい。堅堀群④は、11条からなる堅堀群で、途中で1本になったり、逆に途中で枝別れして2本になるなど、やや統一性には欠けるが、ほぼ南端斜面を放射状に巡らせており、尾根先端防御をしっかりとおこなっている。また、この堅堀群の間に城道⑥が折れ曲がりながら山麓へ続いている。この城道⑥は「上平寺城古図」に描かれた、七曲に相当するもので、山麓居館と山城を結ぶ大手ルートであったと考えられる。

5. 考 察

今回の測量調査によってほぼ上平寺城跡の全貌が明らかにされた。ここで、明らかにされた上平寺城跡の構造について若干の考察をおこなってみたい。

前稿（中井・高橋 1994）では、外升形虎口⑧の構造や、土塁囲いといった点から残存する遺構は京極氏のものではなく、『信長公記』に記された浅井長政が構築したかりやす

の要害の遺構であることを明らかにした。そこには若狭地方における朝倉氏築城の陣城として位置付けられる中山の付け城跡や、あるいは国吉城跡の出丸などに認められる巨大な土塁や虎口構造との共通性よりその築城主体も『信長公記』にある「越前衆」であると考えた（中井 2001）。

今回は南端で確認された放射状の堅堀群を検討することによって、さらに築城主体を絞り込んでみたい。堅堀群についてはほぼ全国的に分布することが明らかにされており（村田修三 1987）、特に戦国大名の特徴を示すものではないようである。ただし、そうした分布において近江は堅堀群がほとんど認められない地域であることは注目してよい。江南の六角氏はその被官の城も含めて堀切もあまり用いられていない地域であり（中井 2002）、堅堀群といった防御思想は持ち得なかったと考えてよい。江北の京極氏、浅井氏の諸城についても単体の堅堀は存在するものの堅堀群はほとんど認められない。

現在、県内で堅堀群と認識できるのは勝楽寺城跡（甲良町）、布施山城跡（八日市市）、鎌刃城跡（米原町）、清水山城跡（新旭町）程度である。さらにこれらの諸城の堅堀群は非常に不鮮明でいびつであり、明らかに上平寺城跡で確認された堅堀群とは同一の築城主体ではない。つまり近江においては今回確認された上平寺城跡の堅堀群は特殊な位置付けができる。

こうした上平寺城跡の遺構を検討するうえで注目できる城跡は県内では小谷城跡の月所丸である。月所丸は小谷城跡で唯一尾根続きで越前へ抜けるルートを防御する目的で構築されたものと考えられる。小谷城跡では珍しく土塁囲いの曲輪が連続して構築され、先端には二重の堀切が設けられている。さらに斜面には堅堀群が設けられており、しかも独立性が非常に高く、単体で構築されたものと考えられる。小谷城では他に例を見ない構造であり、おそらく元亀元年（1570）直後に対織田信長戦のために防御を強化した際に新たに築かれた出城的性格の曲輪と考えられ、その築城は朝倉氏がおこなったものとみてよい。ぶ厚い土塁に囲まれ、堅堀群を設けている点は上平寺城跡の構造と同じであり、やはり上平寺城の築城にも朝倉氏が関与していたことはまず間違いない。

つぎに尾根先端に放射状に設けられた堅堀群の類例を検討しておきたい。福井県のうち越前地方では、村岡山城跡で東方尾根先端部にのみ畝状堅堀群が設けられている。この村岡山城跡は『城跡考』や『朝倉始末記』によると、天正二年(1574)に白山平泉寺と戦った七山家(小原・木根橋・谷・皮合・六呂師・杉山・中野俣の七ヶ村)一揆軍が籠った城と記されている(水野 1980)。しかし、現存する遺構のうち中心部では横堀が巡り、土塁に屈曲がつくのは織豊期に入城した柴田三左衛門勝成による改修とみられる。

福井県のうち若狭地方では後瀬山城跡で、南西尾根先端に堅堀群が集中して設けられている。後瀬山城は言うまでもなく、若狭守護武田氏の本城であり、武田氏滅亡後は織田信長の重臣丹羽長秀が城主となっている。しかし、織豊系の城郭では堅堀群をあまり用いない。このような状況より現存する堅堀群は武田氏によって設けられた可能性が高い（大森他 1989）。

さらに若狭地方では石山城跡からも尾根先端に堅堀群が検出されている。城郭の北東尾根の先端に設けられた堅堀群は巨大な堀切りとうまく組合され、この斜面をつぶしている。他の尾根筋はすべて尾根を切断する堀切のみしか設けられていないのに、この北東尾根だけが尾根筋をつぶしてしまっている点は注目してよい（赤澤 2001）。

岐阜県では菩提山城跡の南端に堅堀群と堀切をうまくドッキングさせた空堀群を見ることができる。菩提山城は永禄元年(1558)に岩手氏を滅ぼした竹中重元が築城し、以後竹中氏の居城となった。重元の嫡男が豊臣秀吉の軍師として有名な竹中半兵衛重治である。その子重門は菩提山城を廃し、山麓に陣屋を構えた。このように菩提山城は戦国期後半の最も発達した山城の形態を示している（中井 2002）。

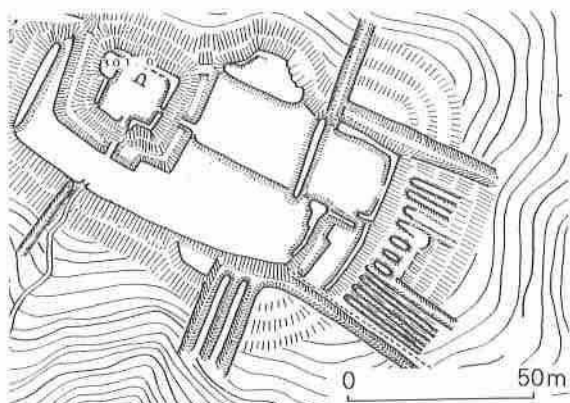
鳥取県では湯谷城跡の北端で斜面に対して平行に巡らされた横堀からほぼ等間隔に設けられた堅堀群が認められる。ここでも北西方向へ延びる尾根では堀切りが連続して設けられているだけで、堅堀群は認められず、尾根筋によって防御形態に差異の存在することがわかる。湯谷城は山陰と山陽を結ぶ日野街道を眼下に見下ろす要衝の位置に築かれているが、城主をはじめその歴史については資料がまったく残されておらず不明である（吉田 1987）。

島根県の山吹城跡では南端斜面が急傾斜であるにも関わらず16条にのぼる堅堀群が連続して構築されている。他の斜面地では堅堀は認められない。城は石見銀山の背後に聳えており、大内氏の銀山開発にともなって築城されたと考えられる。戦国時代には大内、尼子、毛利氏による銀山支配の争奪により山吹城の領有も二転三転する。ただ残存する連続堅堀群は周辺に残る勝山城跡などでも多用されていることから、毛利氏によって構築されたものと考えられる（三島 1987）。

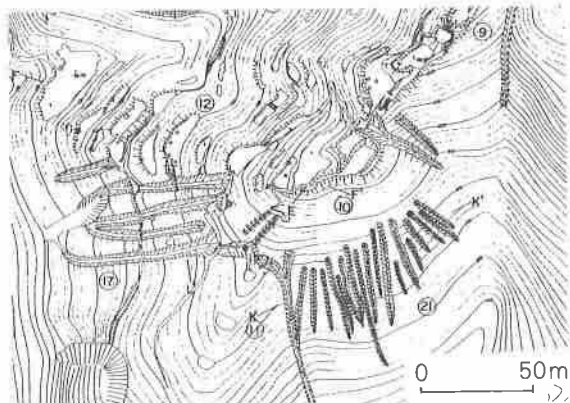
岡山県では篠向城跡で、北西尾根と南西尾根の両先端部にのみ連続堅堀群が構築されている。有力国人三浦氏の支城であったが、天正四年（1576）に毛利輝元に敗れ、宇喜多直家の城となる。しかし、直家が織田信長に内応すると毛利氏が攻め落とすが、直家は直ちに奪還し、以後宇喜多氏の重臣江原親次が入れ置かれている。こうした経緯から現存する連続堅堀群は宇喜多氏によって構築されたものと考えられる（八巻 1987）。

岡山県のうち美作地方では医王山城跡で同様の連続堅堀群が認められる。医王山城は南北尾根筋をほぼ一直線に曲輪を配する連郭式の構造を有しているが、その南端に連続堅堀群が認められる。他に派生する尾根筋には、尾根を切断する堀切のみが構築されており、連続する堅堀群はこの部分にしか認められない。南北朝時代に山名氏の支城として築かれるが、現存する堅堀群などは天正七年（1579）から十年にかけての毛利氏と宇喜多氏との攻防戦において毛利氏側が構築したものと考えられる（八巻 1987）。

このように尾根先端に連続して堅堀群を設ける事例は数多く存在する。拙稿で検討した事例はあくまでもその数例に過ぎない。さらに今回は西国の事例に集中してしまったが、決して意図的ではない。東国でも例えば、新潟県の土沢城跡などをはじめ数多く認められ、いわば連続する堅堀群を用いる地域と同じく汎全国的に分布する防御施設といってよい。



①村岡山城跡 (中井 均 作図)



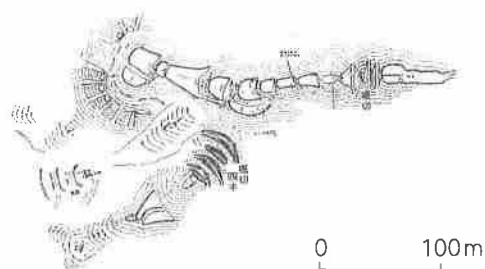
②後瀬山城跡 (参考文献 2 による)



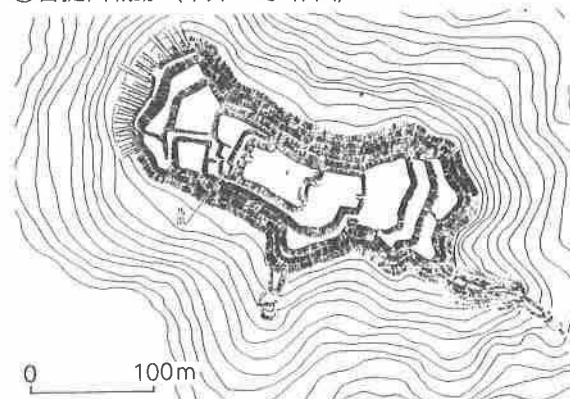
③石山城跡 (参考文献 1 による)



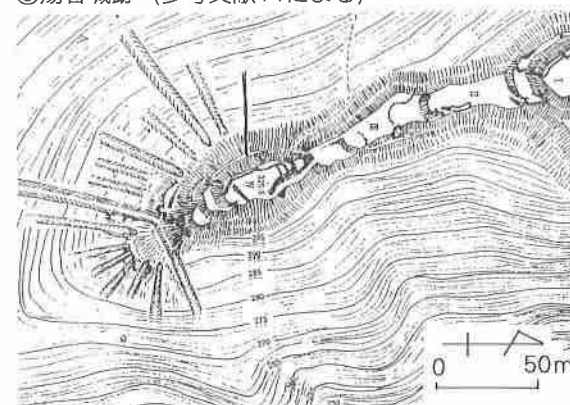
④菩提山城跡 (中井 均 作図)



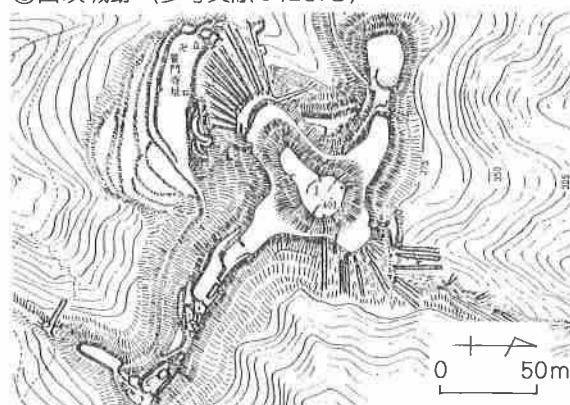
⑤湯谷城跡 (参考文献 14 による)



⑥山吹城跡 (参考文献 9 による)



⑦篠向城跡 (参考文献 12 による)



⑧医王山城跡 (参考文献 13 による)

第 9 図 尾根先端に連続堀切をもつ事例

近江は全国的にも連続する堅堀群がほとんど認められない地域である。逆に越前は連続する堅堀群を用いる地域のひとつであり、今回確認された上平寺城の連続する堅堀群は『信長公記』に記された「越前衆」の築城技術として捉えることができそうである。眼下に織田軍が通過するであろう北国脇往還を望む尾根の最先端に、城に取り付かせない防御施設として設けられたものであった。

拙稿でみてきた多くの事例で、連続する堅堀群が尾根の先端のみに構築され、他の斜面地や背後の尾根筋などには堀切しか設けられていない。これは敵の攻撃正面を強く意識していることを示しているといえよう。

6. おわりに

元亀元年、浅井長政は織田信長から離反し、朝倉氏と結んだ。浅井・朝倉氏にとっての勝機は越前金ヶ崎において信長を挟撃する、その一時だけであったといってもよい。しかし、両氏はその機を逸し信長は朽木谷から京都へ戻ることができた。そして信長は居城岐阜へ帰城し、軍勢を立て直して、浅井・朝倉攻めを開始する。今度は浅井・朝倉氏が防戦する立場となったのである。その第一関門として国境封鎖を目的に築かれたのが、たけくらべ、かりやす両要害だったのである。その築城にあたっては浅井氏領内であったにもかかわらず、朝倉氏が築城を担当している。そこには朝倉氏の築城技術の粋が集められた。それこそがぶ厚い土塁で囲まれた曲輪であり、外升形虎口であり、尾根先端に放射状に施された堅堀群だったのであった。

さらにこの国境封鎖をより強固なものにするために、守備隊として入れ置かれたのが、堀秀安と樋口次郎左衛門であった。しかし、この2人が信長方に内応したため両要害はあっけなく信長の手に落ちてしまったのである。

蛇足ではあるが、鉄壁の城を鉄壁たらしめるのは結局は人なのである。

参考文献

1. 赤澤徳明 2001、「発掘調査された福井県の中世城館 ― 戦国時代の朝倉氏系山城を中心として ―」、『織豊期城郭研究会第9回研究集会資料 織豊期における戦国大名の城』、織豊期城郭研究会
2. 大森宏他 1989、『後瀬山城 ― 若狭武田氏居城の調査 ―』、小浜市教育委員会
3. 高橋順之 1998、『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ 上平寺館跡 ― 京極氏の居館跡 ―』、伊吹町教育委員会
4. 中井 均、高橋順之 1994、「上平寺城とその城下町 ― 遺構と絵図からの再検討 ―」、『近江地方史研究』第29・30合併号、近江地方史研究会
5. 中井 均 2001、「浅井・朝倉同盟の一考察 ― 城郭構造を中心として ―」、『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』、西田弘先生米寿記念論集刊行会

6. 中井 均 2002、「菩提山城跡」、『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第1冊、岐阜県教育委員会
7. 中井 均 2002、「和田山城跡の構造」、『能登川町埋蔵文化財調査報告書第52集 — 神郷亀塚古墳（1次）・中山古墳群・和田山城跡 — 』、能登川町教育委員会
8. 長谷川銀蔵、博美 1985、「上平寺城跡」、『近江の城 第16号 — 特集・上平寺城 — 』、滋賀総合研究所
9. 三島正之 1987、「山吹城」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社
10. 水野和雄 1980、「村岡山城」、『日本城郭大系』第11巻、新人物往来社
11. 村田修三 1987、「城の分布」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社
12. 八巻孝夫 1987、「篠向城」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社
13. 八巻孝夫 1987、「医王山城」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社
14. 吉田浅雄 1987、「湯谷城」、『図説中世城郭事典』第三巻、新人物往来社